

② C型肝炎

C型肝炎は、B型肝炎などと比べて何が違うのでしょうか？

まずはウイルスの特性を知りましょう。

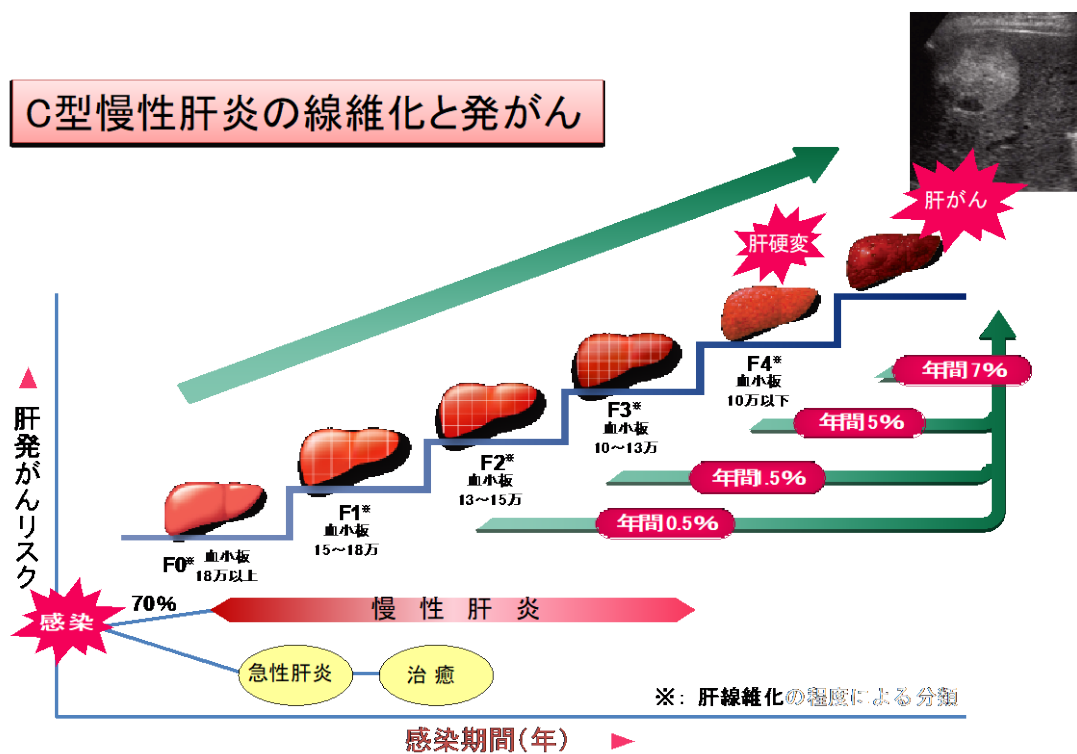
C型慢性肝炎は、C型肝炎ウイルス（HCV）の感染により肝臓で炎症が続き、肝臓の細胞が壊れて肝臓の働きが悪くなる病気です。ウイルスに感染しても約3割は免疫反応によりウイルスが自然に体から排除されますが、残りの約7割ではとくに自覚症状もないまま、ウイルスが肝臓に住みついて慢性化します。B型肝炎は、5-10%しか慢性化しないので、かなり多いですね。

C型肝炎の感染原因

- 経皮感染
 - 薬物乱用、入れ墨
 - 非加熱血液製剤
 - 輸血
 - 集団予防接種？
 - 針刺し
- 経粘膜感染
 - 周産期(少ない)
 - 性行為(少ない)

感染経路不明の患者が全体の約40%

慢性化すると、肝臓の病変が軽いまま経過する場合がありますが、大部分は進行性です。そのため、治療しないで放置すると、感染後 10~30 年で肝硬変や肝がんに移行しやすいことがわかっています。また、肝臓の発症は 60 歳前後で多くなるといわれています。肝臓の発症率は、線維化の状態（Fibrosis : F1~4）に応じて高くなります。F1 では年間 0.5%、F2 では年間 1.5%、F3 では年間 5%、F4 になると年間 8%といわれています。



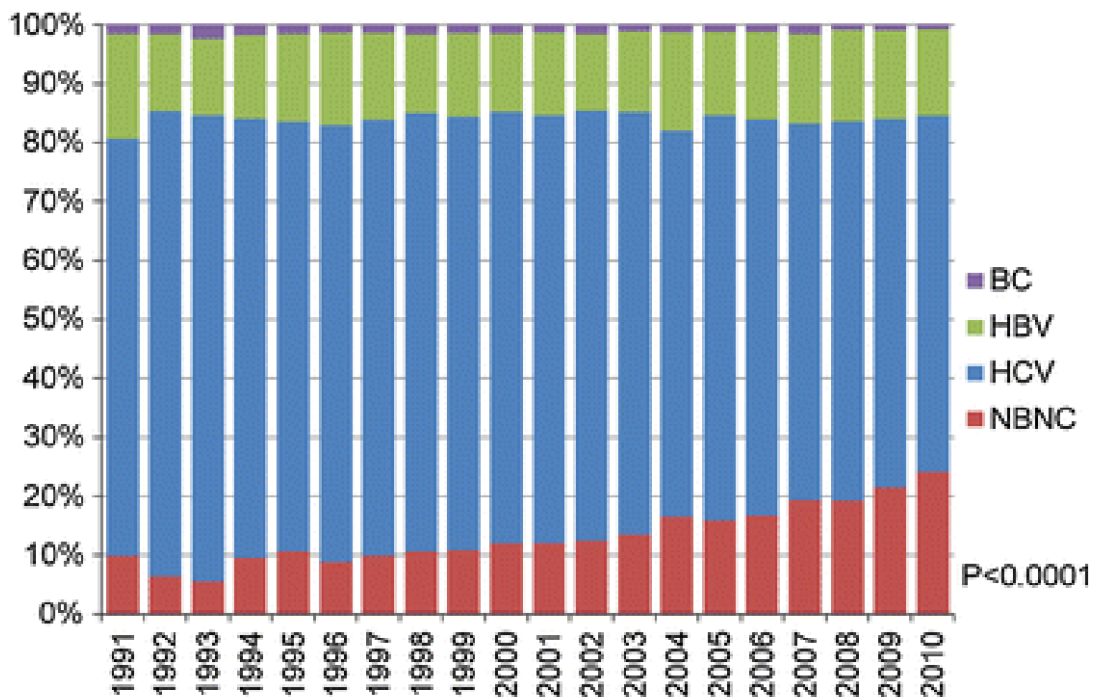
C型肝炎ウイルスに感染すると70%が慢性化

このように、C型肝炎ウイルスを放置すると高率で肝臓になりやすく、肝臓の原因の60%に及びます。B型肝炎の倍の発癌率といわれています。

肝臓を予防するため、基本的に C型肝炎ウイルス陽性であったら治療をお勧め

します。

本邦における肝細胞癌の成因の推移
HCV感染者が約60%



Tateishi R et al. J Gastroenterol. 2014

グラフをご覧ください、C型肝炎が原因の肝細胞癌が減っていますね。近年C型

肝炎に対する治療の発展は著しく、ウイルス治療がよく効いているからです。

【抗ウイルス療法】

C型慢性肝炎・肝硬変の治療は国の助成金制度を受けることができます。(保健所で書類をもらえます。)

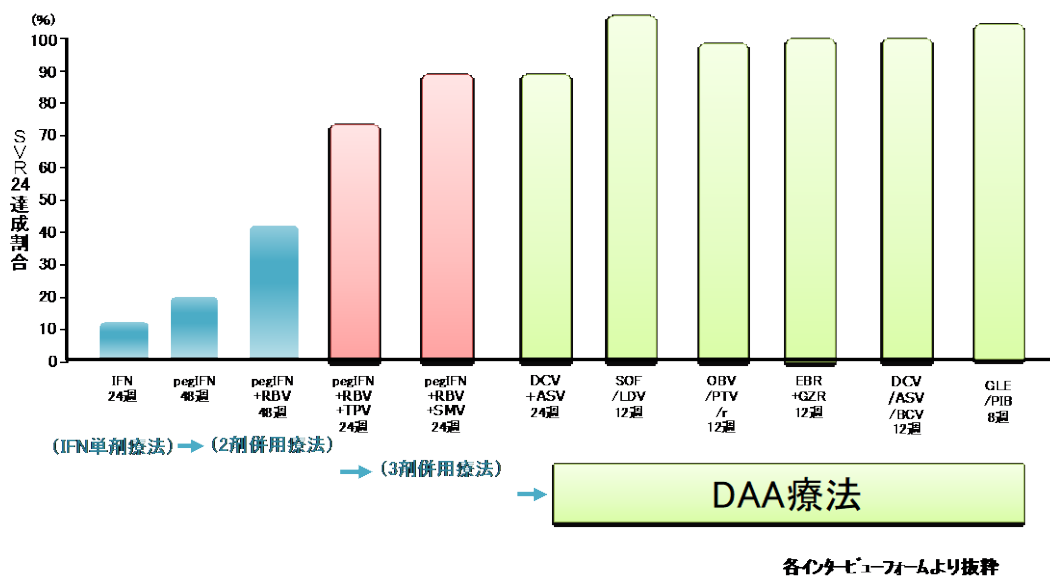
世界中で C 型肝炎ウイルス根絶のための治療をおこなってきた歴史があります。

1989 年に C 型肝炎ウイルスは発見されました。C 型肝炎の抗ウイルス療法は、1992 年のインターフェロン単独療法に始まり、その後他剤との併用療法で徐々に治療効果が高くなってきましたが、副作用の強いインターフェロンベースの治療法であったため、高齢者や合併症等のある患者さんには、有効な治療法がなかったという歴史がありました。

2014 年に承認された飲み薬のみによるダクルインザ・スンベプラ併用療法は、インターフェロンを使用しなく副作用が少なかったため、今まで治療ができなかった患者さんにも治療が提供できるようになりました。この新規治療は、DAA (direct acting antiviral) 製剤といわれ、新薬が毎年のように使用可能になっており、**現在の方法で治療効果は 2-3 か月の飲み薬だけの治療で 95%以上となっています。また一部のお薬は肝硬変の状態でも投薬可能です。**いままでインタ

ーフェロン療法では、効果が期待できない患者さんや、治療しても無効だった患者さんについても高い治療効果が得られています。

C型慢性肝炎の初回治療例を対象とした治療変遷 (ジェノタイプ1の高ウイルス量に対する治療効果)

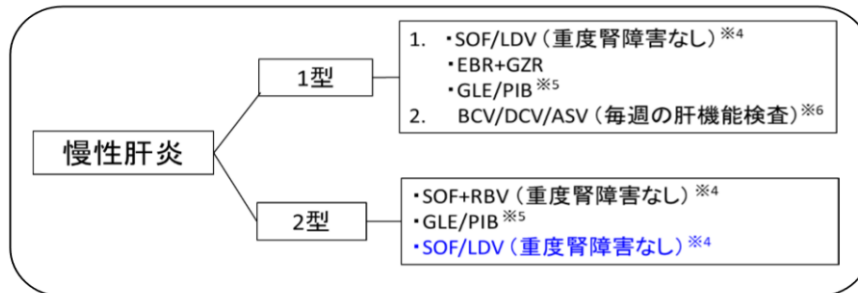


この飲み薬による DAA 治療は副作用が少なく、インターフェロン療法では治療できなかった高齢者や合併症を持つ患者さん（肝硬変、心疾患、腎機能低下、透析者など）にも積極的に治療が行えるようになりました。

今では 80 才以上の高齢者にも治療ガイドラインに沿って治療を安全に行い、ウイルス排除(SVR)が得られております。

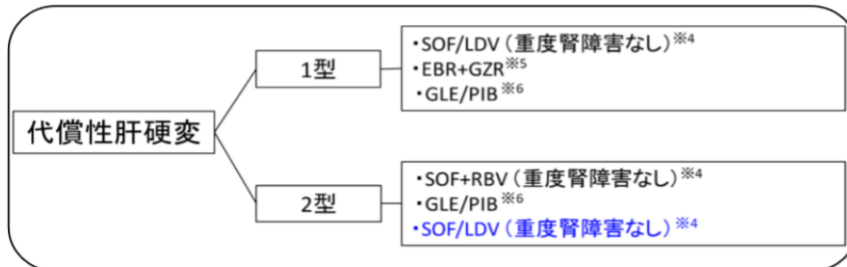
C型慢性肝炎・肝硬変に対する抗ウイルス治療の基本方針

1. 慢性肝炎 (DAA 治療歴なし) ※1 ※2 ※3



※1 高齢者、線維化進展例などの高発癌リスク群は早期に抗ウイルス治療を行う。

2. 代償性肝硬変 (DAA 治療歴なし) ※1 ※2 ※3



日本肝臓学会 C型肝炎治療ガイドライン 第7版より抜粋

【C型肝炎治療後について】

治療効果判定について

世界的に決まっておりますウイルス治療後6か月後までC型肝炎ウイルスがPCR検査にて検出されなければウイルス排除 (SVR) 成功と考えられています。

その後の通院について

治療時の肝炎の状態にもよりますが、C型肝炎が排除できた途端に、肝臓の傷みが改善し、発癌率が下がるわけではありません。感染している期間が長い方ほど、注意が必要です。専門医と相談し定期通院を継続してください。